

St. Luke's International University Repository

精神看護学実習についての看護学生の意識に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Clinical Practice, Nursing Education, Nursing Students, Psychiatric and Mental Health Nursing 作成者: 岡田, 佳詠, 羽山, 由美子, 水野, 恵理子, 下枝, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/425

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

精神看護学実習についての看護学生の意識に関する研究

岡田 佳詠¹⁾ 羽山由美子¹⁾
水野恵理子¹⁾ 下枝 恵子¹⁾

The Awareness of BS Students of the Significance of a Psychiatric Nursing Clinical Practicum

Yoshie OKADA, R.N., M.A.¹⁾, Yumiko HAYAMA, R.N., DNSc.¹⁾,
Eriko MIZUNO, R.N., Ph.D.¹⁾, Keiko SHIMOEDA, R.N., M.N.¹⁾

[Abstract]

The purpose of this survey was to investigate BS students' awareness of the significance of clinical practice on psychiatric units with regard to their learning of psychiatric and mental health nursing.

Mail questionnaires were sent to 635 students of 14 randomly selected baccalaureate programs of nursing who had completed the it practica. Two hundred and ninety students (45.7%) returned the questionnaire. We also collected faculty's comments on clinical instruction from 10 programs of the sample.

Students responded that the main content they learned from the practice was communication skills with psychotic patients. They also recognized that their attitudes toward the mentally ill and psychiatric treatment were less stigmatizing after the practice. They expressed that communication skills and ability to understand the client and family were significant in order to be a professional nurse.

The majority of the respondents (77.3%) were satisfied with their experiences in the psychiatric nursing practice although their learning conditions such as the clinical settings, the ratio of students and instructors, the length of period of practice, etc. were quite various according to the curriculum. It appeared that psychiatric nursing practice itself is important for students in their education, and we need to improve clinical instruction strategies and learning environments.

[Key words] psychiatric and mental health nursing, clinical practice,

[キーワード] 精神看護学, 実習,

nursing students, nursing education

看護学生, 看護教育

〔抄 録〕

本研究では、精神看護学実習における学生の学びや満足感、自分自身の変化・成長などの実習に関する意識を調査し、検討することを目的とした。

対象は、国内の看護系大学のうち、ランダムに選択された14校の学生635名とその大学の精神看護学専任教員で、290名の学生と10校の教員からの回答が得られた。

調査の結果、学生は精神看護学実習において患者とのコミュニケーションを主として学んでいた。また、実習後の自分自身の変化として精神障害者への偏見・差別の軽減、さらに今後自分自身が看護者として成長するにあたって、患者とのコミュニケーションの方法、患者・家族の心理の理解が実習での学習内容として必要であると認識していた。これらは、77.3%の学生が実習に満足したと回答していることに関連していると考えられた。そして、この調査では、学生がコミュニケーション等の学びを深めるために、精神障害者への偏見等を軽減すること、教員の実習へのかわりを工夫することが必要であると示唆された。

I. はじめに

精神看護学が、1997年度からの新カリキュラムにより基礎教育のなかに組み入れられ、はや4年が経過する。その間、それぞれの教育の場で、精神看護学の講義はもちろんのこと、実習においても様々な試行錯誤がなされてきている。また、新カリキュラムでは統合カリキュラムが取り入れられたことで、各大学の教員の自由裁量での運用が可能となっている。現在の社会情勢などを鑑みても、今後、精神看護学の重要性はますます高まると予測されることから、それがカリキュラムに十分反映されることは必須と考えられる。伊賀上・金沢¹⁾が1997年2月、カリキュラム改正直前に27大学を対象に行った調査によると、すでにほとんどの大学で精神看護、精神保健は独立した科目として教授されていると推測しており、1997年4月のカリキュラム改正に向けて、各大学は着々と準備を整えてきたと思われる。しかし、精神看護学がそれまで専門科目として独立して位置付けられてこなかったためか、専任教員が充実しておらず、十分な教育を行うことが困難と懸念されていた²⁾。その後、注目される研究報告はほとんどみられないが、現在もその状況が継続し、あまり精神看護学の専門性や必要性が大学内で十分に理解されないまま、カリキュラムの運用がなされていると推測される。

そのような状況のなか、学生には何らかの教育上の影響があることは否めない。講義はもちろんだが、実習は実践と理論とを統合し、看護者として成長する基盤を形成する重要な学習機会であるがゆえ、教育の影響を受けやすい場であるといえる。精神看護学の場合、専任教員の不足という点も含めて、まだ十分に環境が整っていない場での実習になる傾向があるため、学生の学びや満足感、今後の看護者としての成長への影響がどのようなものであるか、把握しておくことは重要と考える。そしてそれは、学生への教育内容・方法の検討に指針を与えてくれると同時に、今後精神看護学が専門性を発揮し、発展していくためにも貢献すると考える。

II. 研究目的

本研究の目的は、全国の看護系大学の学生を対象に、精神看護学実習における学びや満足感、自分自身の変化・成長などの実習に関する意識を調査し、検討することである。

III. 研究方法

1. 対 象

全国の看護系大学のうち、精神看護学専任の教員が勤務し、かつすでに精神看護学実習を終えた

学生が在籍する国立・公立・私立大学から、ランダムに各々10校ずつ計30校を抽出した。そこに在籍する精神看護学実習を終えた学生と精神看護学専任の教員を対象とした。

2. 期 間

2001年7月1日～31日。

3. 調査の手続き

抽出した大学の精神看護学の専任教員に、あらかじめ文書で本研究の計画書およびアンケート用紙を郵送し、内容確認後、同意を得られた場合、対象となる学生数分と精神看護学教員用のアンケート用紙を一括して郵送した。学生対象のアンケート用紙は、各大学の精神看護学専任教員から学生に配布を依頼し、各学生が添付してある封筒を用い、ポストへ投函するようにした。また、1校のみ、大学内に設置した回収箱に入れるようにした。教員対象のアンケート用紙は、各大学の精神看護学専任教員に記入してもらい、各自添付してある封筒を用い、ポストへ投函するようにした。アンケート用紙は、本学精神看護学専任教員間で独自に作成したものをを用いた。

4. 分析方法

得られたデータは統計パッケージ「SPSS 9.0 J」を用い、学生、教員ごとにアンケート項目ごとに集計し、記述的にまとめた。

5. 倫理的配慮

アンケート用紙に、(1)本研究で得られたデータ

は、大学・個人が特定されないように処理をし、本研究終了後すみやかに処分すること、(2)もし本研究について同意できない事柄が生じた場合、いついかなるときでもそれを拒否することができること、(3)上記に加えて、看護学生に対しては、調査を拒否したり、記入した内容によって、成績や学校内での活動等に支障をきたすことは一切ないこと、を明記した。

IV. 結果および考察

1. 対象者の概要

調査対象となった30校の大学のうち、15校から同意するという回答を得た。そのうち、1校については調査時期の都合上、実施が困難と判断されたため、14校を対象にすることとした。対象となった学生数は計635名、そのうち290名のアンケート用紙が回収された（回収率45.7%）。同様に、14校の精神看護学専任教員に対してアンケート用紙を送付した結果、10校から回答が得られた（回収率71.4%）。

学生の属性については、表1のとおりであった。性別では女性が約96%（278名）を占めた。また、年齢は平均22.4歳（SD=3.3）、21～24歳が計89%（258名）を占めたが、25歳以上では最高46歳まで各年齢で1～3名と、分布にばらつきがみられた。入学状況については、84.5%（245名）が高校卒業後入学しているが、最近学士編入等の流れを反映してか、他大学卒業後入学しているものが8.6%（25名）みられた。

表1 対象者（学生）の属性（N=290）

性別	女性278名 (95.9)	男性11名 (3.8)	不明1名 (0.3)
年齢 (平均22.4歳, SD=3.3)	21～22歳225名 (77.6) 25歳以上25名 (8.6)	23～24歳33名 (11.4) 不明7名 (2.4)	
学年	4年生288名 (99.3)	その他1名 (0.3)	
入学状況	高校卒業後入学245名 (84.5) 看護系短大卒業後入学9名 (3.1) その他8名 (2.8)	他大学卒業後入学25名 (8.6) 看護専門学校卒業後入学1名 (0.3) 不明2名 (0.7)	

() 内は全体に対する割合 (%) を示す

2. 精神看護学に関する学生への教育状況

教員へのアンケートのうち、回答の得られた10校について、学生への精神看護学に関する講義・実習等の教育状況についてまとめた。

まず、精神看護学に直接該当する（支持科目あるいは専門基礎科目等を除く）講義科目について、科目数、単位数、時間数ともに、大学によってばらつきがみられた（表2）。これは、各大学の裁量にゆだねられた結果を反映したものと思われる。また、開講時期は2年前期から3年後期までが多くを占めていた。4年後期に開講している講義科目は、リエゾン精神看護といった広義の精神看護分野のもので、実習終了後に行われていた。

実習科目に関しては、単位数はほとんど2～3単位で、開講時期は3～4年であった（表3）。ほとんどの大学が、講義を終えた後、実習を行っていた。選択必修については、その前の時期に行われる実習からさらに発展させた内容であると思われる。また、実習場所については、精神病院、大学病院が多いが、なかには作業所の実習を行っているところもあり、時代のニーズにそって実習を組み立てていく動きがみられる。

実習での教員の配置については、大半が専任教員によって担当されているが、大学の教員ではなく、病棟の臨床指導者が担当している大学（表中D）、専任教員または非常勤教員が担当している大学（表中H）、専任と非常勤とで担当している大学（表中F）が各1校ずつみられた。選択必修を

除く実習での学生数と教員数の割合は、大学によってばらつきがあり、一回の実習で専任教員1人に対して学生3～4人のところがあれば、専任教員1人に対して学生10人のところもあった。また実習期間全体を通して、専任教員1人が多くて学生30～35人、少なくとも17人前後を担当していた。ここでも、専任教員の不足、そして一人の教員の負担の大きさが垣間見られた。

大学学部内または学科内全体のなかでの精神看護学の位置付けや重要度について、学内の精神看護学専任以外の教員がどのように考えているか、自由記述による回答を得た（表4）。現在のところ、精神看護学の位置付け、重要性に関して、学内ではあまりコンセンサスが得られていないところと、重要度は認識されていると判断したところの両者がある。その違いの背景は様々だと思われるが、今まさに、「担当教員が精神看護学をどう位置付け、教育していくかが問われている」との回答のように、各大学の専任教員が精神看護学の構築に向けて必死に模索し、他領域の理解を得ようと日々努力を重ねている状況が推測される。努力を重ねていても、「リアクションに乏しく、どう受け止められているか未知数」という点是否めないが、「ねばり強く理解を深められるように努力してきた」結果、4単位の授業が実施できるようになったところもあった。平成9年の専門科目としての独立から、まだ4年しか経過していないことを考えると、今後も引き続き、構築に向けて

の模索はもちろん、研究成果も積極的に示しながら他領域に理解が得られるような働きかけを行っていくことが重要であろう。

その他、アンケート項目以外の内容について、精神看護学の講義・実習に関して自由記載を求めた（表5）。現在時間数が限られるなかで、基本的な疾患や

表2 精神看護学における講義科目の単位数、開講時期、他に関して

大学	必修又は選択	科目数	単位数 (合計：単位)	時間数 (合計：時間)	開講時期
A	必修	2	3	90	2年後期, 3年前期
	選択	1	1	30	3年後期
B	必修	2	4	—	3年前期, 2年前期
C	必修	3	4.5 (うち演習1)	90 (うち演習30)	2年前後期, 4年後期
D	必修	4	5 (うち演習2)	105 (うち演習60)	3年前後期
E	必修	4	4 (うち演習1)	120 (うち演習30)	2年後期, 3年前後期
F	必修	4	5 (うち演習1)	90 (うち演習30)	2年前後期, 3年前期
G	必修	1	1	15 (うち演習15)	4年後期
H	必修	2	3	90	2年後期, 3年前期
I	必修	1	2	—	3年前期
J	必修	1	—	60	3年前後期

表3 精神看護学の実習科目に関する内容および学生数に対する教員の割合

大学	必修又は選択	科目数	単位数 (合計: 単位)	時間数 (合計: 時間)	開講時期	学生数に対する教員の割合 (学生数vs.専任・非常勤教員数)		実習場所
						1回の実習	実習全体	
A	必修	1	2	90	3年後期	7 vs. 専任 2	—	公立精神病院
B	必修	1	2	—	3年後期 4年前期	約10vs. 専任 1	120vs. 専任 4	大学病院精神科
	選択必修	1	3	—	4年後期	—	15vs. 専任 4	
C	必修	1	2	—	4年	—	86vs. 専任 5	4カ所
D	必修	1	2	90	3～4年前 後期	12～13vs. 専任 3	—	大学病院 民間単科精神病 院
E	必修	1	2	90	3年後期	—	100vs. 専任 5	公立病院等
	選択必修	1	4	180	4年前期	—	18vs. 専任 5	4カ所
F	必修	1	3	135	3年後期	—	50vs. 専任 2・非 6	大学病院 民間精神病院 作業所
G	必修	1	2	90	4年前期	6 vs. 専任 4	—	公立病院
H	必修	1	3	—	3～4年	6～7 vs. 専任 1 又は非 1	—	大学病院 単科精神病院 作業所
I	必修	1	2	90	3年後期	—	80vs. 病棟臨床指導者 3	—
J	必修	1	2	90	4年前後期	—	70vs. 専任 2	大学病院等

表4 大学学部内または学科内全体のなかでの精神看護学の位置付けや重要度に関する、学内教員の捉え方
(自由記載。一部、抜粋)

- ・(教員) 個々によって考え方が違う。……他教科と同様、重要と考える教員もいるが、mental care はどの領域でもやれるので「精神看護学」は最低のことを教授すればいいと考える教員もいる。……担当教員が精神看護学をどう位置付け、教育していくかが問われている。
- ・指定規則改訂前から精神看護学として独立した柱として存在し、教員も精神科に臨床経験のある専任の者が指導している。……重要度は全体的に高いと認識されていると考える。
- ・学部内で十分なディスカッションはされていないが、カリキュラム改正の流れのなかでは重要性についての認識はあると思う。カリキュラム全体の中での大学としての方向性や構築をどのようにしていくかについての検討が今後の課題。
- ・精神看護学の位置付けについては、機会あるたびに他領域の教員に理解を求めているが、今のところリアクションに乏しく、どう受け止められているのか未知数の部分が多い。
- ・教員全体として、精神看護学の位置付けに対して理解が浅く、その都度繰り返し、ねばり強く理解を深められるように努力してきた。その結果、精神看護学4単位のカリキュラムでの授業が実施できるようになった。
- ・なかなか独立科目にならない現状。将来的にもなりそうにない。
- ・(大学の目的からいって) メンタルヘルスは重要視されている。

看護はもちろん、近年重要性の高まっている人権擁護、インフォームド・コンセント等の内容をいかに組み入れるか、といった意見がみられた。また、臨床実習の場は今後、病院のみに限定せず、地域の作業所や授産施設等での実施も考えていく

ことが必要と思われるが、社会資源の少なさや人手の問題、財政的な面など、導入にあたり解決しなければならない問題のあることが指摘された。

ここで、「体験的学習と講義を組み合わせる」ことが必要であるという指摘もみられた。今回、

表5 アンケートの質問以外での精神看護学の講義・実習に関する教員の意見（自由記載。一部抜粋）

- ・地域精神看護実習を行いたい、社会資源が少ないので、方法を検討しなくてはならない
- ・“精神看護”は学生がイメージ化することが容易でなく、体験的学習と講義を組み合わせる必要がある。ユニット方式など、カリキュラム構成全体で考えていく必要がある。
- ・大学卒業要件の単位数の総計そのものが減少する傾向にあるため、精神に限らず、少ないコマ数、短い実習期間の中で、効果的に指導する内容・方法を考えねばならないのは大変。基礎知識（疾患や基本的看護）と、近年、重要度が高まりつつある社会復帰、人権擁護、インフォームド・コンセントなどの内容を、どのように組み入れるか、構成と比重が難しい。
- ・講義の時間数に限りがあるため、実習前の演習が十分に行えない。コミュニケーション技術に関する演習等、今よりもていねいに行いたい。
- ・最大の課題は、看護教員と臨床側との意識のずれをどう埋めるかということ。現場の受け入れ体制を改善するには、地域格差の大きい指導者研修の全国的な整備と、教員の積極的関与が必要。看護教員も臨床に関与できるようにしたり、教育の場と臨床の場の人事交流を盛んにするなどの制度改革が必要。
- ・臨地実習の場は、作業所、授産施設など地域の施設でも実施することが望ましい。しかし、人手が少ない、謝礼などの財政的な裏づけがないなど、問題も多い。教員は活動の支援などを通して、普段から連携をとるなどの努力が必要。
- ・実習病院の医療状況の変化（例えば、短期入院の増加）で、実習目標の見直しがすすめられている。
- ・学生が受け持つ患者によって学習が異なる。学生にとって、適切な患者選定が難しい。
- ・実習を担当する教員が少ないため、一人一人をていねいにみることができない。

回答の得られた大半の大学では、実習前にすべて講義を終え、実習後に特に講義する時間を設けていないと推測される。このようなカリキュラム体制の場合、実習期間中の体験への意味づけが必要となる。その場合、教員のかかわりが非常に重要となるが、「(学生) 一人一人をていねいにみることができない」という指摘や実習における教員数と学生数の割合などを考慮すると、十分な意味づけが行えているかどうかは疑問が残る。

3. 精神看護学実習以前からの実習への興味について

精神看護学実習以前からの実習への興味については、69.3% (201名) の学生が、興味があったと答えた (図1)。興味がなかったと答えた学生は30.3% (88名) であり、その理由として、「どういう分野かイメージできない」「なんとなく暗いイメージをもった」「あまり精神障害者のことが理解できない」「(精神障害者と) どう接していいかわからない」「恐怖心があった」などがみられた。学生がこう思う要因として、学生自身の好みの問題、マスメディアの影響はもちろんあるが、現在事前に受けている講義や演習の限界も表していると考えられる。今回の教員からの回答 (表

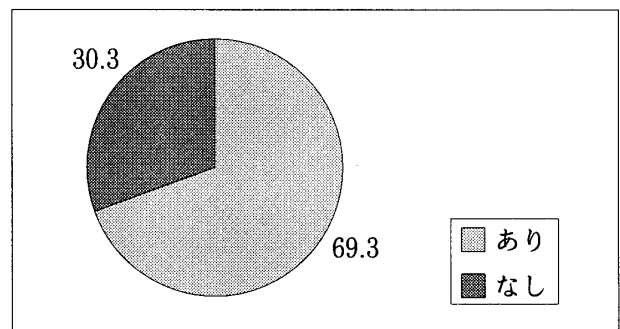


図1 精神看護学実習前からの興味 (%)

5) にもあるように、精神看護は抽象的な内容が多く、イメージ化することが困難な部分があると思われる。そのため、従来の一方通行的な講義のみでなく、視聴覚教材を積極的に用いたり、見学や演習を多く取り入れることが必要と考えられる。

4. 精神看護学実習により学生が学んだことについて

精神看護学実習での学びについて、88.3% (256名) の学生は患者とのコミュニケーションの方法を、66.9% (194名) の学生は精神疾患や心の問題に関する知識の習得ができたと答えた (図2)。その他、患者との対人関係発展の技術については57.6% (167名)、患者・家族の心理の理解については56.2% (163名) の学生が学べたと答

えた。しかし、グループ運営の技法については8.6% (25名) と、ほとんどの学生が学べておらず、保健所や作業所等の地域との連携 (34.1% : 99名)、職種間の連携やチーム医療について (37.2% : 108名) も3分の1の学生が学べた程度にとどまった。

2週間から長くても3週間の実習では、学生が学習できる内容は必然的に限られてくる。また、今回の調査では具体的に把握できていないが、実習の目標をどの時点においているかによっても当然違いはあるだろう。いずれにしても、多くの学生は、受け持った患者を通して自分のコミュニケーションを振り返り、患者との関係を発展させていく技術を学ぶことまではできるが、それが精一杯で、他職種間の連携・協働や保健所・作業所等の地域との連携までにはとても目が向かない状況にある。しかし、なかには「グループ (チーム) で患者にかかわることの大切さがわかった」「サポートする社会資源、地域、家族と、一人の患者を大きな視点でみることができる」(表6) と述べている学生も存在する。精神医療の現場では、一人の患者をめぐる、看護者、医師をはじめ、精神保健福祉士、作業療法士等が合同でカンファレンスを開き、今後の方向性を話し合ったり、病院から地域の作業所や訪問看護につなげるプロセスも比較的に見えやすいため、学生によっては学ぶチャンスに繋がるのかもしれない。現在地域精神保健の重要性が指摘されるなか、今後の地域での実習

をどのように組み立てていくか、課題が山積しているが、差し当たり、病棟内でのカンファレンス等の場面を通して、教員・指導者が意識的に、学生の学びに繋がるように働きかけることが必要であろう。

また、学べた内容のうち、精神疾患・心の問題に関する知識の習得や精神医療機関の特徴と役割、精神障害者の人権・差別・偏見の問題については、約半数の学生が精神看護学実習でしか学べないと回答していた。これは当然の結果といえる。しかし、学生が多く学んでいる、患者とのコミュニケーションの方法や患者・家族の心理理解等については、精神看護学実習でしか学べないと回答した学生が10%前後と少なかった。これは、学生がこれらの内容を、他領域でも学べると考えていることになる。本来、このような内容は他領域でも学べる内容であり、かつ当然学ぶ必要のあるものと考ええる。しかし、現在他領域の実習状況、また表6で示されている「患者との信頼関係ができた」と実感「処置的なことばかりでなく、人と人のかかわり……人間として基本的なことが重要だと思った」といったことから、実際に他領域では、身体的なケアが精一杯で学ぶことができない現状にある。また、精神看護学実習では目標の一つとして掲げることが多いこともあり、コミュニケーションや患者・家族の心理理解が、精神看護学実習での学びの主流を占めることになるとも考えられる。本来、精神看護学実習では、その他に精神症状の査定など精神看護に関する専門的な内容を学習することも重要視している。今後、他領域の実習との調整も含めて、精神看護学実習の目的・目標・方法について吟味することが必要と考える。

5. 精神看護学実習後の自分自身の変化について

精神看護学実習後に自分自身がどのように変化したかについて、回答を得た (図3)。その結果、精神障害者に対して偏見が少なくなった、あるいはなくなったと答えた学生が64.1% (186名)、精神病院への怖いイ

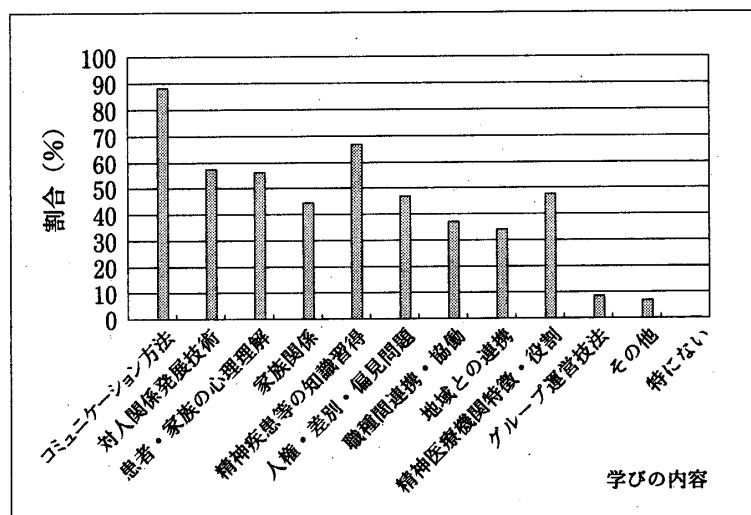


図2 精神看護学実習での学び

表6 精神看護学実習について思うこと（学生による自由記載。一部抜粋）

-
- ・精神看護はやればやるほど興味深い。一人の人間対人間、心と心のふれあいをお互いに感じた。
 - ・自分自身が健康であることが必要。
 - ・グループ（チーム）で患者にかかわることの大切さがわかった。
 - ・精神科の看護は、看護の原点という感じがする。
 - ・受け持ち患者によって実習内容が左右されるのは、つらい。
 - ・実習後にもう一度講義を受けると学びが深まる。
 - ・患者の個性や背景をじっくり考えること、自分と患者とのやりとりを考えること、他のスタッフ、学生同士で意見を交わすこと、……それらにやりがいを感じた。
 - ・‘精神’は目に見えないため、アプローチの仕方がわからなかった。自信を持って看護することが難しい。
 - ・患者にとってもいろいろな意味で、学生が来ることはいい機会になっていると思った。
 - ・自分が癒される、見つめ直せる実習だった。
 - ・（患者が）病院から退院して、社会に戻り、生活するまでの流れがつかめた。
 - ・明確な変化がみられないため、達成感・充実感はほとんどなかった。
 - ・看護婦達は指導だけでなく、協力してくれて実習しやすかった。
 - ・どんなに良い看護を提供しようと努力しても、チームが動かないと提供できず、矛盾や難しさを感じた。
 - ・患者への対応が難しいので、自分は精神科看護婦としてやっていく自信はない。
 - ・患者との信頼関係がつくれたと実感できた。
 - ・個人差が大きく、型にはまった看護は展開できない。難しい領域。
 - ・他領域の実習で、いかに自分の目的を達成するために患者のところに訪室していたかがわかった。
 - ・患者主体で考えられた。
 - ・はじめて人のことと向き合った。
 - ・患者たちのやさしさに打たれた。人間として洗われた。
 - ・あらゆる場面で精神看護はなされるべき。
 - ・処置的なことばかりでなく、人と人とのかわり、相手に対する思いやり、理解しようとする姿勢など、人間として基本的なことがとても重要だと思った。
 - ・病棟にモデルとなる看護者が少なく、机上で学んだことをどう実践につなげているのかわからなかった
 - ・看護者の患者とのやりとりから学ぶことが多かった。
 - ・教員の十分な指導が必要。教員がいないとわからないこと（知識・技術）が多く、また最初は患者に対して恐怖感もあるので、他の実習より、教員・指導者の存在が大きかった。
 - ・他の実習で、患者の心理についてアセスメントできるようになった。
 - ・今後、精神障害を持つ人は増加するといわれているし、他科でも精神看護を必要とする患者が増加すると考えられるので、学生のうちに実習しておくことは意義がある。
 - ・精神的に疲れるので、周囲の友人・教員・指導者のフォローが大切。
 - ・サポートする社会資源、地域、家族と、一人の患者をおおきな視点でみることができる。
-

メージがなくなったについては59.7%（173名）、自分の感情や自分の反応の仕方に目をむけるようになったについては56.2%（163名）、様々な心の問題に関心を持つようになったについては51.0%（148名）であった。この結果から、学生は実習前には精神障害者、精神病院に対して何らかの偏見や怖いイメージを持っており、それが実習によってポジティブに変化したと考えられる。このような結果は、東口他³⁾をはじめ、多数報告されている。

また、今回の結果で注目されるのは、多くの学

生は実習での学びで、患者とのコミュニケーション方法をあげているにもかかわらず、実習後の自分自身の変化として、人とコミュニケーションをとることが楽になったと回答した割合が、6.2%（18名）とかなり少なかったことである。質問内容が適切でなかったとも思われるが、少なくとも学生は、2週間の実習のなかでコミュニケーションの方法は学習できても、それを習得するまでには至っておらず、その後の人とのコミュニケーション場面でもあまり生かせていない状況にあると考えられる。コミュニケーションは短時間でできる

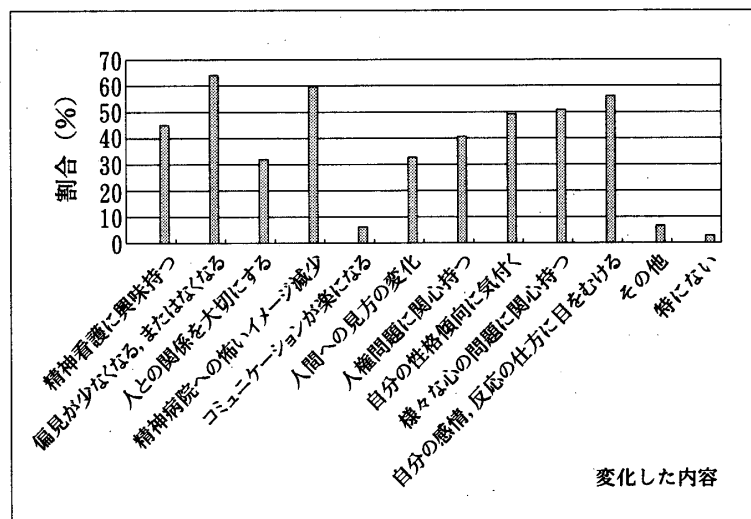


図3 精神看護学実習後の自分自身の変化

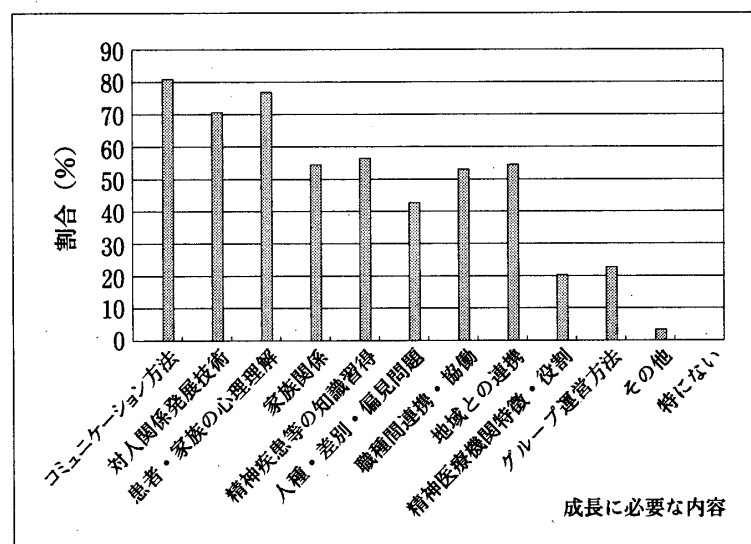


図4 学習内容のうち、看護者としての成長に必要な内容

ようになるものではないため、短い時間の中での学びには当然限界がある。学生が継続して学習できるような体制も考える必要があろう。

6. 精神看護学実習で学習した内容のうち、今後看護者としての成長に必要な内容について

今後看護者として成長するために必要な内容として、最も多くの学生があげたのは、患者とのコミュニケーションの方法で、81.0% (235名)であった(図4)。また、患者・家族の心理の理解が76.9% (223名)、患者との対人関係発展の技術が70.7% (205名)であった。その他、患者と家族との関係や精神疾患・心の問題に関する知識の

習得、職種間の連携・協働や保健所等の地域との連携も50%以上の学生があげていた。前述のように、患者とのコミュニケーションの方法や精神疾患・心の問題に関する知識の習得等については、比較的多くの学生が学習できているが、職種間の連携・協働や保健所等の地域との連携については学習できている学生が3分の1程度にとどまっている。このように、実習では、職種間の連携・協働や地域との連携について、多くの学生が学べていない状況だが、学生は今後自分たちが看護者として成長するにあたり、これらを学習することを望んでいるといえる。教員はこの状況も考慮し、今後の実習体制を考える必要があろう。

7. 精神看護学実習の満足度および必要性について

精神看護学実習を行ってみて、どれくらい満足したかについては、とても満足と答えた学生が19.7% (57名)、まあまあ満足は57.6% (167名)で、満足できていると考えられる学生は、約77%に上った(図5)。この要因として、前述のように、患者とのコミュニケーションの方法や精神疾患・心の問題に関して知識が習得できたこと、精神障害者への偏見が緩和され、精神病院への

怖いイメージが少なくなったこと、実習が自分自身を見つめる機会になったこと、また心と心のふれあいを感じたり、患者との信頼関係を築けたと実感できたこと(表6)があると考えられる。また、表6の「看護婦達は指導だけでなく、協力してくれて実習しやすかった」「教員の十分な指導が必要。……他の実習より、教員・指導者の存在が大きかった」のように、実習における教員、指導者のかかわりが学生の学びはもちろん、学生の満足度にも影響を与えたと推測される。

逆に、満足度が低い学生が3分の1弱おり、その要因として、表6の「明確な変化がみられないため、(達成感・充実感がほとんどなかった)」「‘精神’は目に見えないため、アプローチの仕方

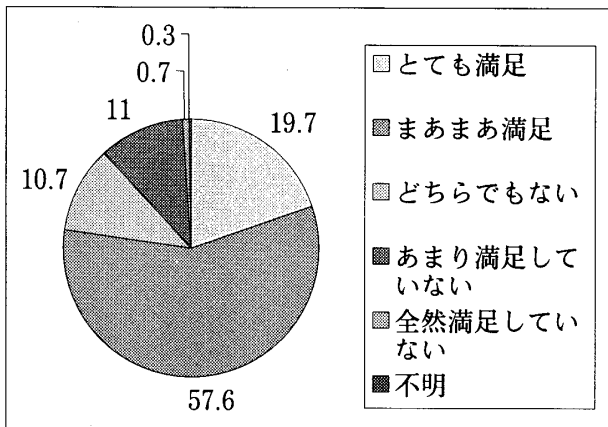


図5 精神看護学実習の満足度 (%)

がわからなかった。自信を持って看護することは「難しい」のようなことがあったと思われる。これらの学生の指摘は、精神科看護者が精神看護を実践する上でも抱えるジレンマではあるが、教員や指導者の適切な介入により、学生が自分自身の実践内容の意味を探究したり、看護者をモデリングすることで多少補うことができるものでもある。教員・指導者のかかわりの影響は、学生にとって大きいといわざるをえない。

精神看護学実習の必要性については、99.7% (289名) とほぼ全員の学生が自分にとって必要と回答していた。このなかには、当然満足度があまり高くはない学生も含まれている。学びが多く、満足度の高い学生はもちろんだが、あまり学びが多くなく、満足度が低い学生でも、現在精神看護学で学習している内容は、今後看護を実践していくなかで必要であり、これからも学び続けなければならないと考えているようである。

8. 精神看護学実習を行いたい時期・期間について

精神看護学実習を行いたい時期は、3年次後期が50.3% (146名) と最も多く、期間については2週間が50.3% (146名) と最も多かった (図6, 図7)。これは、表3の開講時期等から考えると、おそらく現在学生が受けている実習体制がそうになっていることが関係しているともいえる。しかし、なかにはじっくりやるために1カ月くらいは必要とコメントしている学生もあり、どちらかというと2週間は最低期間で、それ以上必要と考えてい

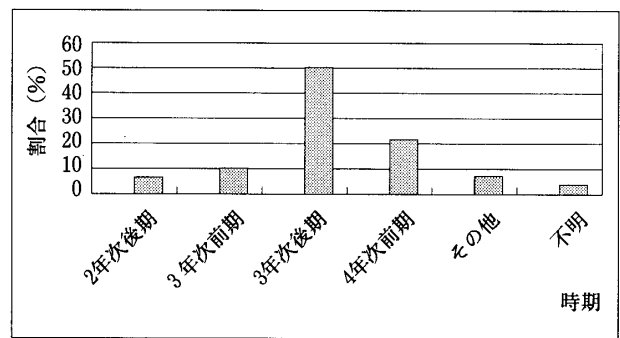


図6 精神看護学実習を行いたい時期

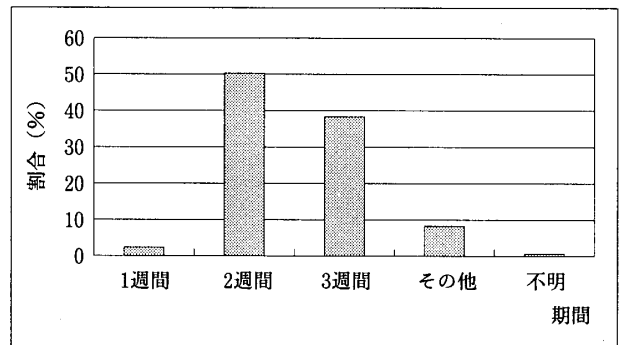


図7 精神看護学実習で必要な実習期間

る学生が全体的に多かった。

以上の調査結果を通して、まず学生が精神看護学実習のなかで注目していることとして、患者とのコミュニケーションがあげられる。学生は、実習のなかで患者とのコミュニケーションを学び、また将来自分が看護者として成長する上で必要な内容としてコミュニケーションを捉えている。おそらく、学生は実習を通して、患者と交わすコミュニケーションの治療的意味や人と人との相互関係を、机上ではなく、体験的に理解していると考えられる。これは、阿保⁴⁾がコミュニケーションの教育について、看護実践という全体的な行為の中で統合されること、つまり体験的にわかることが必要であると述べていることを支持するものである。そして、この体験的な理解が、精神看護学実習の学びの根幹であり、他領域とは異なる独創的な部分を示すと考えられる。

しかし、このような体験的な理解は容易にできるものではないだろう。今回の調査結果から考えられることとして、学生が体験的な理解をしていくプロセスには、まず学生自身が精神障害者に対

する偏見・差別を乗り越えることが必要となる。実習後の自分自身の変化として、多くの学生が偏見が少なくなったり、精神病院に対するイメージの変化ということをおいており、それが体験的な理解を促進することにつながったのではないかと推察される。柳川⁵⁾は、学生に不安・偏見が大きい場合、患者と向き合う姿勢が消極的となり、看護計画に創意・工夫や自己決定できるような働きかけができにくい傾向があると指摘している。このことから、まず学生が少しでも偏見・差別を減らせるような状況を作っていくことが必要だろう。

また、学生が体験的な理解をしていくためには、教員・指導者の役割が重要であろう。今回の学生への調査結果からも、特に教員のサポートの必要性がいくつか示されている。安酸⁶⁾は、経験型の実習教育を進めるにあたり、教員には学生が相談したくなるような雰囲気があること、あるべき論を唱えず、学生の気持ちや気づきに耳を傾けること、教員自身が他者からの働きかけを謙虚に受け止め、その姿を学生に示すこと、が必要と述べている。まさに、学生は実習のなかでこれらの役割を教員に求めており、またそれが精神看護学実習で教員に求められる能力になるのかもしれない。この能力については、個々の教員が努力して獲得していかなければならないものではあるが、同時に、今後も専任教員の不足など、ハード面の問題にも取り組むことが必要と思われる。

V. おわりに

今回の調査では、精神看護学実習における学生の学びや満足感、自分自身の変化など、学生の実習に対する意識について明らかにし、検討を行った。その結果、学生はコミュニケーションを主流に学び、自分自身の変化として精神障害者への偏見等の軽減を経験し、今後自分自身が看護者として成長するために、患者とのコミュニケーション

の方法等が学習内容として必要であると認識していた。また、これらは、学生の満足度に影響を与えていると考えられた。そして、学生の実習でのコミュニケーション等の学びは、精神障害者への偏見等の軽減や教員のかかわりが影響を与えることが示唆された。

今回の調査は限定された教育機関における結果をまとめたものであるため、一般化することは困難と思われる。また、学生の意識という視点で考えた場合、調査項目が妥当であったかどうか、疑問も残る。しかし、今後もこのような学生の実習に対する意識についての調査は、精神看護学の教育内容・方法の検討、さらに精神看護学の専門性を向上させる上で必要不可欠と考える。今後も対象数を増やし、研究方法を工夫して、継続した研究を行っていききたい。

謝 辞

研究に快くご協力くださいました各大学の学生、精神看護学教員の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 伊賀上睦, 見金沢彰. 看護系大学における精神保健・精神看護の教育. 精神科看護. 65, 1997, 97-102.
- 2) 前掲論文1)
- 3) 東口和代, 米沢久子, 菅野久美子, 中村風, 森河裕子, 中川秀昭. 精神科臨床実習と精神障害者観の変容についての一考察. Quality Nursing. 4(9), 1998, 69-76.
- 4) 阿保順子. 精神科領域における「コミュニケーション」の特徴と教育の実践. Quality Nursing. 2(6), 1996, 39-47.
- 5) 柳川育子. 精神科看護実習における学生の意識変化をもとにした実習展開の検討. 看護教育. 39(5), 1998, 380-385.
- 6) 安酸史子. 経験型実習教育の考え方. Quality Nursing. 5(8), 1999, 4-11.